

璃奈津が世界にふりまくのは、愛と優しさ、そしてほんの少しの
勇氣だ。

愛でゆるして、優しさで包み込み、そして勇氣でもって背中を押
してあげる。

人々に与えるのは神様であって、璃奈津ではない。神様からの贈
り物であるそれらを人間のところまで運ぶのが、璃奈津の任務。い
わば運搬人、運び屋、あるいは仲介人、そんなところだろう。

——でも、神様のお使いをしてくれるなら、それって“天使”ってこ
とだね。

思いつきでわたしがそう言ったら、頭を叩かれた。結構な力で。
そしてただ一言、「死ね」と返された。

わたしに「死ね」と吐き捨てるその口で、璃奈津は愛や優しさを
語る。

「つまり、何億分の一だか知らないけど、その中から選ばれた超
ラッキーな人間に施してやるわけ。愛と優しさ、あと勇氣を」

「どうして選ばれた人だけなの？」

「はあ？ 全員にあげちゃったら価値がなくなるじゃん。愛と優し
さと勇氣の。価値もだし、意味もなくなる。全部がアタリのルーレッ
トとかくじ引きに、なんの意味があんの？」

その通りだ、と思つてわたしは頷く。それでもどこか腑に落ちな
いものを抱えているのを感じとつたのか、璃奈津は眉を寄せて不快
そうに舌打ちをした。

「……あ、ごめんね」

わたしは璃奈津を怒らせたら、すぐに謝ることにしている。

璃奈津は答えずに、制服のスカートとセーラーカラー、それにス
カーフといろいろなものを風になびかせながら立ち上がった。その

肩には、狙撃銃が担がれている。そして、はっ、と息を吐き出すよ
うに、強く、楽しげに笑った。

「敗者復活戦の機会を与えられるだけありがたいと思え、負け組の
ゴミくずども——って話だよ、要はさ」

その言葉は、きつと、わたしを含む全世界の、すべての人間へ向
けられたものなのだろう。——『敗者復活戦』なんて言うけど、も
ともと、勝ち負けの話なの？ そんなことを訊いたらまた叩かれて
しまいそうなので、わたしは黙っている。

☆

今日の“当選者”は、三十六歳の女性だった。名前は遠藤香さん。
無職。家族構成は両親と母方祖母と、コーギーが一匹。長く病気を患っ
ていて、中学生のときからずっと病院通い、入院を繰り返している
。お祖母さんも現在寝たきりで認知症の進行がひどくて、そちら
の方は母親が介護中。だけど今日はお祖母さんがデイサービスに出
かけていて家にいなくて、お母さんも久しぶりに友人とのランチで
羽を伸ばしている。だから家の中には彼女ひとりだ。ひとり、パジャ
マ姿で家の中にいるその人の姿を、わたしは双眼鏡を通して見てい
る。部屋の広さは八畳。ベランダの掃き出し窓からは、部屋の中が
よく見える。右側の壁に添うようにベッド、左手には机と椅子。右
奥隅にはタンス、左奥に廊下へ出るドア。その部屋の中、遠藤さん
はベッドの上にごろんと横になったまま動かない。

「あーっつい！ もうー！」

璃奈津が唐突に、怒鳴るように言った。

確かに、暑い。八月の真昼間、天気は快晴、最高気温は天気予報
では三十七度。ここは屋上でコンクリートの上なので、実際はもっ